

## 目次

電話室にて	9
ウイルソンの休日	45
国際的社会主义者	89
フィリップ・マンスフィールドの失踪	124
ボーデンの強盗	153
オックスフォードのミステリー	187
キャムデン・タウンの火事	224
消えた准男爵	256
訳者あとがき	297
解説 横井 司	300

Superintendent Wilson's Holiday

1928

G.D.H. & M.Cole

「あれは巧妙な殺人事件だった」

自分が関わった事件について、珍しく話してみようかという気になると、ウィルソンはよく言ったものだ。「しかし、わたしからすれば、あの事件で最も重要だったのは、行動の速さが必要とされた点だ。用心深い偽造者が関与していると推測し始めた瞬間から、わたしは確信していたんだ。もし、数時間でも遅ければ、事件の痕跡は薄くなるどころか、存在さえしなくなってしまうだろうと。それで、容疑者の拘留については、そのこと自体が完全な間違いとされる危険を冒さなければならなかった。まったく立証されていない容疑でその人物を正當に拘留しておける時間内で、彼の犯行を証明する必要もあった。時間との戦いさ。そしてもちろん、そんなことがいい仕事につながるはずもない。注意力散漫で仕事がぞんざいになれば、先入観による憶測で方向を誤ることになるし、重要な証拠を見落とすことにもなる」ここで、聞き手の数人は笑みを浮かべることになる。ごく普通の人間が、ウィルソンを注意力不足などに見なす機会が、いったいどれほどあるだろう。しかし彼は、お構いなし

に先を続けた。

「これは本当のことだよ。事件の捜査では決して急ぐべきではないんだ。時間をかけていくつも仮説を組み立て、捜査を進める過程でその一つ一つを検証していくべきだ。一つの推理に固執するのはよくない。さて、今話しているこの事件だが、わたしの仮説がみごとに崩れ、警察がひどく非難されることになっても不思議はなかった。うまくいったのは、思いがけない幸運の賜物だったんだよ。もちろん、マイケルなしには、この事件を解決することはできなかった」

「ならばあなたは、知性のない生き物から協力を引き出す能力に長けてるんでしょね」マイケル・プレnderガストは笑った。「つまり、わたしは冬眠中のカメラほどにもお役には立てなかったという意味です。わたしは何もしていませんよ。あなたが思い至ったことに、わたしは何一つ気づかなかったんですから」

「きみの存在の重要性と必要性については、それとなくほのめかしていたんだけどね、マイケル」ウィルソンは言い返した。「それに、きみの優秀な医者としての知識も。しかし、実際のところ、きみは常にわたしのそばにいて、結論に至るまでの各段階にちゃんとついてきていたはずなんだが」

「カメラにだってそばにできたでしょうね」とマイケル。「もし、自分を今にも鼈甲べいこに変えてしまおうとしている人間のすぐそばにいるなら。わたしが覚えている限りでは、あなたは今にも、わたしの逮捕を命じそうな勢いだったんですからね」

「ならば、きみは忘れていたんだよ」とウィルソンが返す。「きみのアリバイについては、わたしが一番の証人だということを。それに、今に至るまで——ひよつとしたら、何の根拠もないのかもしれないが——わたし自身も、自分が信頼できる証人だと思っていたことを。加えて、こんなふうに言う

のを許してもらえらるなら、犯罪の解決はきみの能力範囲を完全に超えている。きみの巧妙さは、そうした方面で発揮されるものではないからね」

ここに至って、数人の仲間たちが二人に詰め寄った。謎めいた話はいい加減にして、どんな事件ならこれほど興味深い話になるのか説明しろと要求したのだ。そして、あれこれと問い詰めることで——二人とも話し上手だという自負は少しもないのだが——以下のような話を引き出すことに成功した。

新聞社が名付けたところのダウンシャーヒル殺人事件は、一九二〇年の五月、ある日曜日の朝に発覚した。この国の気候が、夏の製造方法についていかにも知ったかぶりをしようとしたかのような、気持ちのいい朝のことだった。ロンドン警視庁のヘンリー・ウィルソン警視は、友人のマイケル・プレンダーガスト医師とダウンシャーヒルのハムステッドを歩いていた。かの百万長者ラッドレットの衝撃的な死より、かなり前のことだ（誰もが思い出すように、英国とアメリカをプラカードで埋め尽くした事件。当時、前内務大臣を秘密裏に調べるといふ許し難い罪に関わっていたウィルソンを、個人的な調査のために異国へと追い込んだ事件だ（『百万長者の死』（G・D・H&）（マーガレット・コイル著を参照））。ウィルソンは現在もCID（犯罪捜査課）で働いており、いつ自宅から公の職務へと呼び出されても仕方のない立場にある。そしてその状況には、少なくとも一日くらいは電話のベルが届かないところに身を置くようにという、同居の姉の言いつけに従っているとは決して言い切れない懸念があった。しかしながら、その日は気持ちのよい朝だった。数少ない親友の一人で、土曜日の夕方から夜を一緒に過ごしていたマイケル・プレンダーガストが、彼の切実なる願いをかなえるために協力してくれていた。その結果、フランネ

ルのズボンにテニスシャツといういでたちの男が二人、ノース・ロンドン駅に続く道を足取りも軽く歩いてたわけ、彼らはそこから、リッチモンド行きの列車に乗り込むつもりでいた。

「ここなら本当に、田舎にいて感じられるんだらうなあ」小さな前庭を埋める木々や、道路の先を塞ぐヒースの若々しい緑に目を留めながら、プレンダーガストは楽しげに言った。「一晩中、窓の外でフクロウが鳴いていたんですよ」

「この辺りではフクロウも家のそばまでやって来るからね」ウィルソンが答える。「でも、家の壁に巣作りをしているフクロウの鳴き声は聞いたことがないな」

「わたしもありませんね。どうしてですか？」答える代わりに、ウィルソンは百ヤードほど先の蔦に覆われた小さな家を指し示した。ライラックと栗の若木の茂みから、ほんの少し見え隠れしている家だ。

「ちよとあそこの蔦を何かが出たり入ったりしているんだ。あの大枝のあいだだよ」

プレンダーガストはウィルソンをまじまじと見つめた。「目がいいんですね。あのライラックは見えていましたけど、ほかには何も気づきませんでした。どうしてあれがフクロウだってわかるんです、こんなに離れているのに？」

「さあね」とウィルソン。「違うかもしれない。そんなにはつきりと見えたわけではないし。でも、ほかの鳥にしては大き過ぎたからね。いずれにしろ、同じように見ていたかもしれない男がもう一人現れたよ」すでに二人は蔦に覆われた家に近づいていた。西側の部分は隠れて見えないが、正面部分はすっきりと全体が見渡せた。門の脇の歩道に、その建物に興味津々という様子の男が一人立っている。通りかかった二人を不安げな目つきで見上げたが、その様子には話しかけたものかどうか、迷っているのがあるありと伺えた。誰とでも会話をすることの誘惑に抗えないプレンダーガストが、即座

にその態度に反応した。

「あなたもフクロウを見たのですか？」そう問いかける。

「フクロウ？」男は答えた。「そんなものは見てないよ。でも、そこに入っていく男を見たんだ」家を指さして男が言う。「そいつは何のために中に入りたかったのか？　それが、おれの知りたいことだ」

「その人の家なんじゃないんですか？」プレレンダーガストは言った。

「はあ！　なら、何のために、そいつは窓から中に入りたかったんだ？　それがおれの知りたいことだ。死人でも叩き起こしそうな剣幕でドアを叩いていたんだ。おれに気づくとそいつは言った。『この家、何か変なんです。返事が返ってこないんですよ』ってな。それでナイフを取り出すと、その窓から入っていった。自分の家なら何のためにあんなにドアを叩いたのか、中の何が変なのか、それがおれの知りたいことなんだよ」男は疑わしげに言い捨てた。

彼の疑問はすぐに、劇的すぎるほどの展開で解消された。家の中から足音が聞こえ、門から二十ヤードも離れていない正面玄関のドアが突然開いたのだ。青ざめ、驚愕の表情を貼りつかせた小男が顔を突き出し、全身から絞り出したような大声で叫んだ。

「人殺し！」

三人はぎよっとして凍りついた。実際、その男の叫び声は、キャムデン・タウンくらいまで届いたに違いない。三人の驚いた顔を見た男は、かなり混乱した様子だったが、門まで出てくるとひどく低い声で言った。「どなたか、警察を呼んでもらえませんか？　カールークさんが殺されたんです」

男は門を閉めると、家に戻ろうとするかのようなそぶりを見せた。ウィルソンの頷きに応えたプレ

ンダーガストが、小道を戻る男を追いかけていく。「何かお手伝いできることはありませんか？」彼は愛想よく声をかけた。「わたしは医者ですから」

「可哀相なあの男が必要としているのは、医者なんかじゃないよ」小男は答えた。「魚みたいに冷たくなっているんだから。きつと、死んでからもう何時間も経っているんだ」玄関のドアに手を置いて男は立ち止まった。「あなたたちが警察を呼んでくれるなら、わたしは彼と一緒に家の中にいます。家を無人にしておくべきではないでしょう。本当に誰もいないんですから」

「大丈夫ですよ」門のそばにいた男との会話をやめてウィルソンが二人に近づいてきた。「ロンドン警視庁の者です。名刺ならここに」そう言つて煙草ケースから名刺を一枚抜き出す。マイケルは、友人がリッチモンドでの自分の職務上の権威をどんなふうに使おうとしているのか、興味深く観察していた。小男は、まるでそれが蜘蛛でもあるかのように恐る恐る受け取ると、差し出した相手の服装を見て顔をしかめた。警官なら警官らしい服装をすべきで、フランネルのスボン姿などで歩き回っているべきではないと、その男が思っているのは明らかだった。

「先ほどまでここにいた男を、ロスリン・ヒル署まで知らせにやりました」ウィルソンが続ける。「警察なら数分で到着するでしょう。しかし、あなたがおっしゃるとおり、現場を無人にしておくのはよくありません。そこで、死体がある場所を見せていただけなら、わたしが初動調査を始めることができます。ここにいるわたしの友人なら、被害者がどのように殺害されたのかも判断できますし、あなたは本当に彼が殺されたと信じていらつしやるのですか、ええと……？」

「バートンです」小男は言った。「エドワード・バートン。彼は間違いなく殺されたんですよ、刑事さん。頭を撃ち抜かれています。気の毒に、脳みそが床中に飛び散つて。どうぞ、こちらです」自分



の判断に疑いを挟まれたことに、小男は少しばかり傷ついたようだ。

「まあ、まあ、一緒に見てみることにしましょう」ウイルソンが宥める。なだ。「被害者はどこです？」

「電話室です」バートン氏は指さしながら言った。「階段の右脇。あのガラスのドアです。ドアを支えて開けているのが被害者の脚でしょ。彼には触っていませんよ。死んでいるのを確かめただけです」

## 2

ウイルソンが薄暗く小さな電話室のドアを引きあげたとき、彼らを出迎えたのは決して気持ちのよい光景ではなかった。そしてそれは、バートン氏の判断から生じた確信の正しさを完璧に証明していた。床の上に、かつては壮健な五十から六十歳代の男であったはずの物体が、片脚をドアの敷居に交差させてぐにやりと横たわっていた。顔を電話機のほうに向け、丸くなって倒れている。何かを握りしめたまま死んで、その後、握っていた物が転げ落ちたかのように、両手の指が鉤状に曲がっていた。しかし、死因については単純すぎるほど明快だった。顔全体と頭の一部にいくつもの穴があき、傷口からじわじわと流れ出した血液と脳みそが床を覆っているのだから。マイケル・プレンダーガストは戦争を経験し、死には慣れていると思っていた。しかし、陰惨で血生臭い殺戮現場にずたずたにされ、横たわる老人の姿は、完全に征服したと信じていた感情を掻き回し、ドア口の敷居を踏み越えるときには猛烈な吐き気と戦わなければならなかった。

「気をつけて歩いてくれよ、マイケル」ウイルソンが注意した。友人はこの光景にまったく動じてい

ないらしい。プレnderダーガストは羞恥と苛立ちを覚えながらその事実が気がついた。「できるだけ現場を乱さないでくれ。手に入る限りの証拠が欲しいからね」彼は、血に覆われた床に残る見落としたような足跡を不満げに調べていた。「あなたはこの中にいらっしやっただすよね、バートンさん?」

「もちろんです」小男はむっとした調子で答えた。「もちろん、彼のために何かできることはないか、見に行っただすから。何もできないとわかると、拳銃がないか辺りを見回しました。彼が自分で自分を撃つた場合のことを考えて——つまり、自殺だった場合のことですが」

「ライトをつけてもらえますか?」死体の上に屈みこんでいるプレnderダーガストの声がした。「地下の石炭置き場みたいな場所では何も見えない」

「故障しているんですよ」バートン氏が言った。「中に入ったとき、わたしも試してみたんですが」そう言いながらも、彼は素直に、古いデザイン磁器製のスイッチに手を伸ばした。が、ウィルソンのほうが早かった。ハンカチでくるんだ手で何度かスイッチを前後させるが、反応はない。

「壊れているようだ」とウィルソン。「たぶん、電球がいかれているんだろう。わたしの懐中電灯で何とか間に合わせてくれ、マイケル。でも、できるだけ早く。この気の毒な男のために我々ができるのは、犯人を捕まえる以外にはないからね。できるだけ早く取りかきたいんだ」プレnderダーガストが検分を終えるまでのあいだ、彼はじつと戸口に立って辺りを見回していた。まるで、小さな部屋の中にあるものをすべて記憶しようとするかのように。部屋の奥のかなり高い棚の上にきちんと据えられた電話機。二、三の古びた説明書が置かれたその上の棚、電話機がある棚から床まで届く分厚いカーテン。